

# 癌の治療法は完成していた

At last you can read ---- **THE RIFE REPORT**

## **THE CANCER CURE THAT WORKED!**

### **FIFTY YEARS OF SUPPRESSION**

Written by **BARRY LYNES**

"A fascinating account" — Alan Cantwell, M.D.  
"Masterpiece of journalism" — Roy Kupsinel, M.D.  
"This book is superb" — Florence B. Seibert, Ph.D.

50年間封印されてきた  
ライフのガンの治療法の研究の報告がついに、  
解禁された。

Written by **BARRY LYNES**

バリーLYNES 著 三上 皓也訳

「驚くべき報告」—アラン・カントウエル医学博士  
「ジャーナリズムの傑作」—ロイ Kupsinel 医学博士  
「この本は素晴らしい」—フローレンス B.サイバート Ph.D。

# ガンの治療法の研究の発見と封印！

隠れた献身的な科学的天才の魅力的な報告

彼は、人間のガンのための原因と療法を発見した

そしてその男の人生と彼の研究を破壊しようとした強力な権力者の話

" 「ガン細菌」の著者アラン・カントウェル博士  
「バリーLynes は、我が国で最も正義感のあるなレポーターの1人である。  
ロイライフの長年の友人ジョンクレーンの助けを借りて、バリーは傑作を書いた....  
人類へのプレゼントとして 1930 年代に知られていたガンの原因と良い治療法の全ては、こ  
れらの年月、医学医薬カルテルによって隠蔽された。  
バリーは我々がライフの研究の復活を促進するのを助ける

ヘルスコンシャスネスジャーナルの編集者

「Roy Kupsinell 医学博士、

「私は、この本は素晴らしいと思います

そして、我々科学者の偉大な先輩とでも書くことができます

しばらく前まで、私にはライフの顕微鏡の知識がありませんでした。

私には、この顕微鏡が破壊され失われていないことはとてもよろこばしいことです。

それによってこの研究を支持することが可能になり、すべての人を勇気づけます。

ライフの報告を書いた著者に何度も感謝します」

フローレンス B.サイバート、博士

TB 皮膚テストの作成者

そして、N.Y.女性科学者栄誉殿堂に入った

ライフの研究は、必ず、公正に「新しい」知識に照らして再調査されなければならない

この、「古い、知識は、確認済みだが人が使用するようにはならなかった。

ライフの天才が作り出した製品は、時期尚早であった、

そして、ライフの考えたことに、重要な情報、または全ての答えが含まれているだろう」

コロラド州立大学-ジョン W.マッティングリーの前書きから

ISBN 0-919951-30-9 90000 ISBN 0-919951-30-9

9 780919 951303

カバーby Doris Diehl)

# **THE CANCER CURE THAT WORKED!**

著作権バリーLynes 1987

著作権所有。

この出版部分が出版者の前の書面による同意なしで、どんな形でも使用すること、または、電子的に、機械的に送信されて、写真複写すること、レコーディングまたはその他複写、検索システムで保存することは、著作権法違反になります

1987年5月第1版

1989年1月第2版

1989年8月第3版

1992年4月第4版

1994年8月第5版

1997年10月第6版

1999年6月第7版

2000年8月第8版

Published in Canada by Marcus Books,  
カナダのマーカス書店によって出版される、

P.O.Box 327, Queensville, Ontario,  
私書箱 327、Queensville、オンタリオ、

Canada LOG 1 R0.

カナダ LOG 1 R0

ファックス(905) 478-8338

電話 (905) 478-2201

カバーデザイン

ドリス・ディール

ISBN 0-919951-30-9t 3

人々の健康は、本当に人生の基本である  
国民の幸福と全ての基礎となるパワーは、人々の健康による

**Benjamin Disraeli**

ベンジャミン・ Дизレーリ

真実は明るみに出、殺人は隠すことはできない。

シェークスピア

## 人々がこの本を作らせた

ロイヤル R. ライフは、1888 年に生まれて、20 世紀の偉大な科学的な天才のうちの 1 人であった。

彼は 1920 年にガンのための治療法を研究することを開始し、そして、1932 年までに、彼は癌ウイルスを分離した。

彼は実験室の培養組織で癌ウイルスを破壊する方法を学んで、動物でのガンの治療に進んだ。

1934 年に、彼はクリニックを開き 3 ヶ月以内に 16 の症例のうちの 16 人を完治させた。南カリフォルニアから医者を連れていくこととともに、アメリカで最つも尊敬された研究者と研究し、彼は、患者の癌ウイルスを電子的に破壊し患者自身の免疫系を健全にした。南カリフォルニア大学の特別研究委員会は、1930 年代の終りまで、研究所の研究と実験的な治療を監督した。

クリニックによって指導された U.S.C. 医学委員会の委員長は、1934 年に引き続いて 1935 年、1936 年と 1937 年と、クリニックの結果を確かめた：

その装置を利用した独立系の医者は毎日 40 人もの人々の治療にあたり、この協力者の治療に成功した。

硬化ガンと他の致死的な病気に加えて、白内障のような退行性の状況も、回復させた。

ライフは病原体に対する正確な電気周波数を確定することができ、それはガン、ヘルペス、結核と他の病気に関係する個々の微生物を破壊した。

そして彼の成果が科学雑誌（医学専門誌）に書かれた後、スミソニアン協会の年報が、報告した。

残念なことに、ライフの科学的な理論と治療方法は、正統的見解と衝突した。

彼の研究は止められ、そして、研究と治療は強制的に非公認の地下のものとなった。

1934 年の最初の成功の後、クリニックは常に医学界と政府権威筋からの反対にあったが医者は、ひそかに 22 年間継続して、がん患者を治療した。

しかし、1950 年から 1980 年代中頃まで、何人かの、独立して研究していた研究者はライフの 1930 年代の臨床治療の根拠となる科学的な原則をゆっくり確認していた。

50 年前、ライフによってデモンストレーションをされた最初のガンの論文は現在科学的な証拠が具体的に確認され、圧倒的に支持され明晰に話されている。

これには、現代のエイズ研究者も含まれる。

1950 年代のジョン・クレーンは、エンジニア、機械工学、研究所アナリスト、医学研究者、発明家で、ライフの共同研究者であった。

クレーンは 1915 年に生れ、1950 から 1971 年にライフが死ぬまでライフと研究していた。

この間に、彼はライフのガン療法の全ての秘密、そしてその封印の全ての詳細な過程を学んだ。

一緒に、2人は、新しい優れた器材を設計し、造った。

そして、新世代の医者に正真正銘可能性のある領域として、興味を起こさせるように資料を管理してきた。

そして、また、機会あるたびに権威ある者たちは攻撃しクレーンは投獄され、器材は壊され、記録は破壊された。

その封印させる動機は、いつも同じであった。

クレーンは長いあいだ隠された事実をライフと共有してきた、そして1930年代から所持された、何千もの文書とともに、完全に経過を話すことが出来た。

著者バリーLynes（1942年に生まれた）は、カリフォルニアに住んでいる調査リポーターである。

彼の研究分野と、書く記事と書く本の主題は、経済理論、気候の変化、歴史、米国とソビエトとの関係といった問題の他に、代替医療が含まれている。

1986年前半に、彼はジョン・クレーンを知り、『ライフの全てを、彼から直接聞き、Lynesは初め懐疑的であったが、クレーンの所有する文書の価値を調べた後、彼の心を変えた。

ライフの研究の隠蔽と破壊の不正に憤慨したLynesは、この本に書かれたことを知らせることに決めた。

あなたは、今その結果を読もうとしている。

# 前書き

量子力学は、観察する対象から観察者を切り離すことが不可能であることを示したが古典的な科学的方法の支持者は、この問題を嫌悪している。

そして、日常的な科学的実践において、この現象と同じ性質の問題については、実際的な方法で対処すべきなのに、何も行われていない。

この状況は、おそらく驚くべきではない。

科学的作業は、人間の視界と認識の問題を単純に考えることで、その視界が多様に見えることからくる不明瞭な確定できない苦しみを継続させている。

進行中の新しい発見に対する先入観と同様に、その視界は、なんらかの画一的な自然法則に基づいてできあがった間違っただけの仮説でゆがみ、いつも科学的な論争ひきおこす。

実際人間という種の中にある多様性のように、人間の視界には、多様な、その人固有の見え方があることは自然な法則である。この自然な法則は変わることができない。

しかし、その特性の問題は、科学研究での実践的に認識の質を向上させようとすれば、明快に理解されなければならない。

個人個人の5感はずべて違っており、量的にも違って感知される。

.例えば、我々の何人かは眼鏡なしで見、または、補聴器なしで、聞く。微妙な味、においを鋭く、またはその性質をよく感じるができる。

.さらに、そのことの意味は、既に得ている知識の性質または個人の経験によっても変化する。世界の認識、我々の存在、我々の意識のあり方は、相対的で、多くの混乱の一因となる。

心の回路は、それ自身変化するものなのである。

脳に損傷を受けた患者の研究の中で、心理学者は、帽子が妻だと思い続けている症例を見つけ出した。

このようなケースが、我々や、さらには科学者の間にないと言いきれるだろうか？

この感覚の気まぐれな性質の引き起こす錯誤は、人間にとって、最も影響力の大きい部分なのだが、我々は不思議なことにこの問題にほとんど注意を払わない。

我々の間の誰が、マゼランの航海日誌に出てくる原地の人と同じことなどしないと絶対に言えるだろうか。

「マゼランが探検で最初にテラデル **Fuego** に着いたとき、

**Fuegians** の人は何世紀もの間、他から孤立して生きてきたカヌー文化だったので、船が湾に停泊していても、それを船として見るができなかった。

彼らの経験からは大きな船の存在は、考えることも出来ないものであった。

その船の大きさにもかかわらず、完全に地平線がまっすぐ続いているとしか見えなかった：船は、視野の中にはいってこなかったのだ。

この事例は、この地域のこの後の探検方法に関して注意すべきこととして学ばれた。

**Fuegians** の人の報告では最初シャーマンが、村民に何かえたいの知らないものが、到達し

たことを、伝えたと書いてある。これは信じがたいことだが、人が慎重に見たならば、船がきている事実を、確認できたことを示している。

なぜ彼らは船が見れなかったのかと、人は聞くだらう。

これらの船はとても明白に存在しており、きわめて現実的存在であった。

どうしてこのあまりにも明白な物事を、他の者は、見れなかったのかと、聞くだらう。

この問題と同じように、顕微鏡の中にある世界を視界的に認識することは、厄介でむずかしい。

近年、医療評論家が、100年前は、顕微鏡が不可解な混乱を引き起こす装置であったと述べた。

それはその時代では疑いなくそうだろうが、しかし、今日でも、まだ不可解な混乱を引き起こす装置である。

この装置には固有の複雑さがあり、この道具と技術は基本的に無限に多様で、人間の視野を非常に拡大させ発展させてきた。

顕微鏡は、それ自体に、レンズ構成、拡大倍率、焦点と照明といった変数が含まれる。

何千もの染色料と染色法は長年かけて完全に発展し、顕微鏡の技術を複雑化する重要な一因となっている。

顕微鏡の使用者が未知の領域の中で、これらの固有の変数を決定しようとするとき、これらは依然としてとても厄介な要素である。

顕微鏡は小さな物を簡単に見える大きさに拡大し、特に見本が活着しているか、かつて生きていたものならば、生命プロセスの流量と形体といった複雑な世界を心の眼に届ける。

しかし宇宙旅行者は、こうした顕微鏡を使う細菌学者よりも優れた方法と手段を所持している。

顕微鏡はとても素晴らしい道具ではあるが、観察する人間一人一人が違う-認識力と、視界における変化の要素を考慮してはいないので、一見際限のない混乱が蓄積する。

間違いなく、我々は真実をみるために、畏怖の中で進行し、立たなければならない。

しかし、我々は長くこのように立ちつづけることができない。

古くからの健康の問題はもっと深刻になり、新しい病気はほとんど毎日出現している。

ロイヤルレイモンドライフの話は、新旧の知識の両方に焦点をあて、その関係を理解させる重要な情報を含んでいる。

顕微鏡と微生物学の歴史の中で起きた、いくつかの事件は、ライフの発見と彼の自然を洞察しようとした苦勞の価値を信用すべきものにさせる。

1870年頃、アントワヌベシヤンは、彼の顕微鏡で、彼が「microzymas」という名前をつけた小さい運動型の組織体を見つけた。

最初に、20世紀の最初ガンサーEnderleinは、これらの組織体を見て、それらを「内生生物と呼んだ」

ウィルヘルム・ライヒは、1930年代後期に、似た物を見つけて、同一の組織体とまではい



えないが「バイオン」という名前をつけた。

この時代に、他の人も同じものを見つけていた。

今日スウェーデンで、そして、カナダで、これらの同じ生きた粒子の特性は、研究者自身の想像力によってつけられた名前で研究されている。(訳者注 弾圧されたカナダのガストンネサンのソマチッドサイクルの研究もこの考えの発展と考えられる。後半の付録参照)

この研究者のグループのメンバーによって進められたいろいろな理論は、拒絶されるか、主に忘れられている。

不思議なことに、これらの研究者の全ては、よく知られてはいるが、まれにしか使われないダークフィールドコンデンサーを使っている。

微生物学では、特異な観察方法で得られた発見の価値は、たとえ真実だとしても、他の者に確信させることはきわめて難しい

顕微鏡に 1930 年のライフのような照明システムを用いることは今日のように、知られていず、それはただ単にまれな方法であるだけでなく、未知の方法であった。

ライフの解明した生物学的発見と顕微鏡についての基本的な技術は、最大の攻撃と破壊の対象となった。

未知なるものへの恐れは、単に不慣れなことからくる恐れより大きい。

科学者でも、この人間の本能に免疫があるわけではない。

ライフの顕微鏡で使われている前例のない照明方法に抵抗を示さなかった 2、3 の人が、いた。

しかし、彼らはライフの研究を見て、次の問題にぶつかった。自身のドグマから見ると単なる光学顕微鏡でそのような高倍率と分解能が達成可能であったことは理解不可能だと言い、観ているものを信じなかった。ライフは、不正直で、目の上にベールをかけて見ており、青空に雲を引き入れて本来明確に見えるものを厄介なものにしていると逆に攻めた。理論は必要不可欠だが、しばしば、人はあまりに長くその固定概念にとらわれることとなる。

最近、このライフの発見は生物物理学で再確認された。

その発見は、ライフの顕微鏡のもつ驚異的倍率と従来の光学顕微鏡を超えた分解能によってもたらされ、顕微鏡で対象を見るときを原理をライフが考え直すことで可能になった。意外なことに、これらの「新しい」発見の背後にある基本的な問題は、世紀の変わり目の直前に心理学者から物理学者になったギュスタブ Le ボンによって書かれた。

その時点では、現在のように、学問分野の境界を越える能力のある人は存在しなかった。

今日の生物物理学者は、自然の中に生命物質と光子の間の重要な交互作用が存在することを明らかにしている。

このプロセスは、細胞 (バクテリア) レベルで測定可能である。

他の研究は生体系がとても低いエネルギー電磁波にとっても敏感であることを、実証した。この研究はまた、各々の細胞または微生物は固有の振動数の電磁スペクトルと交互作用する性質があると言っている。

ライフの顕微鏡システムはいろいろな手段で、人の視覚に影響を与えるよう光の周波数を調節する。

いくつかの洞察によって、彼は光と対象との「共鳴」、または「フィードバック・ループ」をつくる原因となるよう、対象になっている微生物の固有振動数に光の周波数を「調律する」ことが可能なことを知った。

実質的に、この共鳴状態をつくることで、微生物それ自体を照明したとも言える。

特別な視覚的才能をもったことで、見れたというわけではなく、彼が非常に熟練した顕微鏡使用者の目から、生命物質の電磁特性を新たに発見したことによるのではないだろうか？

ウィルヘルム・ライヒは、自身の理論的防衛力に基づき、他の研究者が彼の顕微鏡を使用出来ない原因を理解したとして— 優れた顕微鏡は標本に共鳴することを学ばなければならないと言った。

ノーベル賞を獲得した穀物遺伝学者バーバラ・マックリントックは、「有機体には感覚がある」と説明した。（普通では見えないものを彼女が見ることが出来たために、その人は他の人に理解させるのに長年苦労した）

おそらくライフには視覚力と洞察力という二つの才能があり、さらに生命のミステリーを完全に見ることを可能にする装置を造ろうとした。

彼の装置は作動した、しかし、世界はこのミステリーを見る目がないままであった。

ライフは彼の照明テクニックから推定して、特別の電磁周波数には、特定の細菌の型に対する殺菌効果があることを理解したと思われる。

そんなライフ自身の仮説の正しさを、勇気ある少数派のために知覚的に明確に見せようとして実証したことは疑いない！

ライフは生物物理学だけでなく同様に照明の原則について新しい発見をしており、これは同時にバクテリアの選択的な破壊方法を発見させることとなった。

後者の現象は超音波洗浄と似ているが、波形と周波数を細かくデリケートに選択するところが大きく異なる。

近年、調査結果が封印されてしまった研究者の報告によれば、マウスの群れに同じように電磁波を確実に照射することで、ガンの原因を、治療した。

ライフの研究は、これよりはるかに洗練されたものであった。

彼は特別な顕微鏡で目標を選択し、実際に、目標が炸裂するのを確認した。ライフの研究ではバクテリアが単一形態 **monomorphic**. というよりは、むしろ多形態 **pleomorphic** なものとして実験した。

この実験は権威ある科学の政治的管理者に、他の誰よりも最悪の怒りを引き起こした。

彼の特別な多形態理論に基づく病因論は、生物学の権威ある基本的学説を強力に否定した。

『(病気の原因を病原菌とする説を否定した)』

今は誰でも、色々な病気が特徴ある細菌が原因であることを知っている。

これは、コッホの原則と予防接種の成功によって完全に証明された。

しかし、かつてアントワーヌベシヤンは、microzyma 論を唱え、全生体とかつて生きていた有機体の中に、バクテリアになる前の小さな粒子を見つけ出し、その粒子から、特徴のあるいろいろなバクテリアの型が呼び起こされて発生し、様々な病気の状態になると言ったことを誰もが忘れている。

アントワーヌベシヤンは 1800 年代後半の間、バクテリアは多形態であることを主張し、広範囲にデモンストレーションしたが、科学を政治的に管理する人々には具合の悪いことであつた。(訳者注 このベシヤンの microzyma はライヒの「バイオン」カナダの学者ネサーンの「ソマチッドサイクル」と共通の考え方である。ともに学会から奇妙にも無視され、ライヒにいたっては獄中で死んでいる。)

ベシヤンの理論においては、バクテリアは病気の最終原因というよりむしろ徴候である。ベシヤンの時代からバクテリアの多形態性と内因性の原因は、繰り返しデモンストレーションされてきたが、今日の生物学者はこの概念を理解しようもしない。

おそらく、古くからある病気も新しく発現してくる病気にも、今日の医学が完全に対応できず、失敗の連続である原因は、この権威ある伝統的な細菌説が不完全であることを理解させないよう、圧力がかかけられているせいだろう。

1800 年代後半の間に、医学の細菌学の発展方向は、主に営利的考えによって設定された。感染症に関して科学者にはいくつかの答えがあつたが、1つの答えだけが正しいとすることは優れて政治的、商業的意味があつた。

ベシヤンの考えはただ単に奇妙なものであるだけでなく、主流派には複雑で不愉快なだけであつた。

実際、ベシヤンの理論は多分伝染性の病気だけでなく、多くの変性疾患に関連するだろう。

(特別な原因もないのに神経細胞や神経組織が崩壊してしまう疾患のことをいう。アルツハイマー病、パーキンソン病、ピック病、ハンチントン病などがこれに含まれる。)そして、このベシヤンの生きていた時代より、今、この多くの変性疾患の患者数は増大し、たいへんな関心事になっている。

予防接種の本当の有効性と長期の効果は現在疑われているが、一応それは機能してきた。細菌説自体は比較的明白で、病気の原因を特定することによって、市民を安心させることは簡単で、しかも細菌は見えないし、身体の外から来るものであつた。

これは、人に病気の「原因」への、距離感を与えた。

病気の「原因」から少しでも距離があることは、病気の性質がとてもミステリアスであつた時代には慰めとなつた。細菌説は、人々にホッとしたため息とともに受け入れられ、説明できないよりはましであつた。

ライフと、彼の有能な仲間、権威あるこの細菌説のドグマの色調を変えることは出来なかつた。

今日、細菌が多様な形態をもつ事実は、病気の原因が明確には分からないことに同意する細菌学者の少数のグループによって、静かに認められている。

この少数の研究者は、他の自明の生物学的現象、例えば進化と微生物の共棲などとともに、理論が未完成である事実そのものに立ち帰って考え始めている。

多形態性のプロセスは、理解不可能なほど複雑である。

それが存在する事より、むしろその変化のプロセスが問題であった。

細菌学者は、生きた標本をめったに見ないので、このプロセスを理解することは困難だった。染料と染色法に心を奪われて、電子顕微鏡を使って夢中になって見るが、彼らはすでに死んだ標本を観察しているだけだった。

生きた標本を見るライフの顕微鏡がライフの批判者を混乱させたことは、ほぼ疑いがない。それは彼らの確信を否定するとして強烈な対立心をおこさせた。そんなわけで、彼らは細菌の多形態性の証人にはならなかった。

細菌の多形態性を実際に生きた状態で観察し、理解することは、免疫系と変性疾患のミステリーを解明するには必要である。

伝統的な微生物学の外へ 1 歩でるならば、全ての論争と、悲劇的要素に支配された視界から自分を何とか隔絶することができ、おそらく、この問題に新しい光を当てることができる。多形態性が意味することはシンプルである。

「一つの有機体、または種には、いろいろな異なった型があること、または、2つ以上の型に結晶する特性がある」という仮説（Dorland のイラスト医学辞典より）：

あるいは：

1、ライフサイクルで2つ以上の型が発生する(植物の)

2. 同じ動物にも多くの型があること」(ウェブスター)

長期間でも比較的短期間でも、命は多くの形態に変化する。

生命を長期間で見たならば、どうだろうか？

現在少なくとも命が 34 億年前から地球上に存在したという確実な証拠が、ある。

今日地球上で生命自体が絶滅したとしても、これまでに非常に長いライフサイクルを経験してきており、それは孤立した単一細胞から無限に種類のある複雑な生命型式に変化してきた。

この意味で命は無限で、命は多形態である。

我々人間は、お腹の中にいる比較的短期間に種自身が発展してきた形をひとまとめに、発現させ、命の無限の広がり全体を経験しつつ、その変化を再現して、不滅のものにさせる。

つまり我々は、出生時から比較的短期間で、植物、動物、鳥といった、多形態の生命の変遷を、すなわち分、時間、日、週、月、年といった単位と、数十年、世紀にわたる変化を、周期的な型で発現させてゆく。

性的な方法で命を複製してゆくタイプは、内部の異なる器官を形成するため、同一の細胞が特別な細胞に変化し、群れを作り始め、それぞれの器官となり、それらの共生と協力によって人間や動物のような複雑な生命を構築してゆく。

受精した卵から出生までの間に、胚は成長して多くの型に変化する。

成熟した動物は「多様に变化した多くの型」のなかの1つの型で、さらにこうした観点から言えば人間の知性も多形態な性質をもつと言えるだろう。

この観点で考えることが、許されるならば、教育と経験はその「生命の型」を変えるためのものである。

英語で、「トートロジー同語反復」ということば（概念）が、あるが、これは「ことばや、フレーズ、または命題、考えの、冗長な言い換えや、不必要な繰り返しをいう。または「プレオナズム」、これは同じことを意味なく、違う表現で言うことを意味するが、こうした概念は生命がいつも変奏曲のように「形」を変えていこうとする本能的な欲求を示しているのではないか？

その意味で、多形態性は共生と進化といった特性と同じように、生体の重要な性質である。バクテリアは、生きものである。

これらバクテリアは、多形態性で、共生的で、進化しようとして絶えず変化する。

数年前に、性能の向上した光学顕微鏡が各種出てくると共に、生きた標本が見られる顕微鏡に対する興味が、初めて生まれた。

これらの性能の向上した革新的な方法による新しい顕微鏡は、ウルトラバイオレットか「ウルトラバイオレットに近い光源」からの、光の通路を、単独で、または、いくつか組み合わせて、用いる。

しかし、ウルトラバイオレットの光源は、ほとんど全てのバクテリアに強い否定的な効果がある。

生きた状態を見るという点から見ると、絶望的な、この妥協的方法は、否定的な効果を考えずに使用されている。

新しい顕微鏡の多くは、コンピュータで、画像処理し強調する。これは微生物学的に克明に認識させるか、かえってかけ離れたものにするかもしれない技術である。

また、染色することによって、多くの複雑な要因を導入する。

もちろん、最低線は、細菌学者が共に同意できる「生きた生命の標本の基準」を構築することである。このためには長大な研究時間が前途に立ちほだかり、装置は複雑になり、操作も難しくなる。

ライフの顕微鏡が、比較的単純で、生きた生命の標本を観察するのに適していて、直接的で理想的なことが思い出される。

この新しく作られた光学顕微鏡のどれもが、ライフ顕微鏡の拡大倍率と、分解能力に近づくことができなかった。

1960年代にフランスで発展したほとんど知られてない装置が一つあるだけだった。

これはライフに近いものである。

今日、この顕微鏡は、150 オングストロームという信じ難いほどの分解能力で、拡大倍率4500倍で稼働する。

暗視野集光器を付けた普通の高品質の研究装置のように見える。

そして、光源はウルトラバイオレットの近辺と、レーザーの混合物から成り両方の周波数は明らかにされていない。操作の原則は、ライフの方法に近いものだろう。

## 個人的ノート：

初めて私自身(ジョン W.マッティングリー)の研究用顕微鏡（暗視野集光器を付けている）で、私自身の目で、無処置の新しい人間の血液の標本で、細菌の多様な形態のプロセスを見た時、何を見ようとしているか私が「知らなかった」ならば、これを「見ることは出来なかった」。

ベシヤン、ライフ、ライヒその他を研究し、そして、完全に 25 年間現象を研究した、才能ある顕微鏡使用者が私のパーソナルな指導者だったので、何を探すべきか教えてくれた。

この本の著者バリーLynes は、ライフの研究と、彼の顕微鏡と、特にライフの仲間がガンの臨床治療において、電磁周波数発生器を複製して使い、成功した症例を力強く報告している。これは非常に望ましいことで、ライフの研究は、必ず、「新しい」知識を考慮し、公正に再調査されなければならないからである。

これらの「新しい」知識には、定義済みではあるが、まだ答えられていない多くの疑問がある。ライフの穏やかな才能の所産は時期尚早であったが、これらには重要な情報または全ての答えが含まれているだろう。

**John W. Mattingly**

ジョン W.マッティングリー

コロラド州立大学

## 第 1 章ガンの治療法

1934年夏に、南カリフォルニア大学の後援で、アメリカの細菌学者と医者に指導されたグループは、カリフォルニアに最初にガン・クリニックを開き、癌の治療に成功した。

その結果は、微生物がガンの原因となることを示していた。

病状が末期的な癌患者で痛みを伴わず原因と思われる微生物を、破壊することが出来、同時に病気の症状を、完全に無くすことが出来た。

この技術的な発見はガンの治療法として発展し、1931年の科学雑誌に発表された。

1934年の臨床成功に続く10年間に、このテクノロジーとその間の癌患者の治療の成功例は、医学会議で議論された。医学雑誌は慎重に報道し、大きな新聞も専門的に報告し、スミソニアン協会年次報告に発表し、技術的にも説明した。

しかし、このガンの治療法は、何人かの科学者、医者と財政的な権益を脅かすため、隠蔽するよう誘導された。

この新技術を使って治療していた医者は、廃棄するよう強制された。

その後スミソニアン協会年次報告の記事の著者は、車を運転している間に、銃撃された。

彼は、二度とこの問題を書かなかった。

治療法を記載した全てのレポートは、主要な医学専門誌とAMA（アメリカ医学協会 American Medical Association）の上部によって検閲された。

政府の研究所による装置の科学的な評価は、阻止された。

この細菌学とテクノロジーの分野での新しい科学的な見解を支持した有名な研究者は、軽蔑され、嘲笑され、面前でうそつきと呼ばれた。

結局、このガン治療法については、数十年間、長い、真っ暗な闇の中に放置された。

この期間、この治療法は極めて不満足なもので、「神話」だとレッテルを貼られた。

しかし、現在入手できる文書は臨床試験で13人は成功したことが明らかにされており、その治療法が有効であることを証明している。

実際は、その後もこの治療法は長い間ひそかに使われ、他の病気と同様にガンの治療に使用された。

この発表禁止処置は医者と研究者にこの治療法を知らせ、医学を向上させることを、阻害した。

この発表禁止処置にもかかわらず、他の科学的な研究者は、基本的な原則の確認を続けた。

10年早く行なっていたカリフォルニア・グループの研究を知らずに、1940年代後期から1950年代初期に、ニュージャージーの病院研究所とペンシルバニアの研究所に協力していた研究者は、これに類似した発見をした。

1950年、これらの研究者はニューヨーク科学アカデミーの前でプレゼンテーションをする準備ができていた。

しかし、また、政治勢力が介入して、シンポジウムは中止された。

1953年に、この問題の基礎科学を確認したカリフォルニア・グループの理論は、イタリアローマでの国際微生物学会議で、ニュージャージー・グループによって紹介された。

ニューヨークタイムズとワシントン・ポストは、この発見を報告した。

しかし、このグループがアメリカに戻ると、1950年にアメリカで発表を阻止したのと同じ、強力な勢力がひそかにニュージャージー研究所の資金源をストップしていた。

このグループを指導していた研究者は、カリフォルニアへ引っ越して、新たに出発することを強いられた。

その同じ年の12月、カリフォルニア・グループのリーダーと1930年代に成功したガンの治療に対して、最も責任ある医師は長年の沈黙をやぶって、ガンの治療結果とその治療方法の説明を出版した。

ワシントンD.C.の政府直属の国立癌研究所の権威は、ワシントンD.C.郊外のベセズダ、メリーランド米国医学図書館で、その本を受け取った。しかし、彼らは無視した。

図書館スタッフは責任をもって本を保存し、閲覧可能にしたが、癌研の究方針を確定している当局がそのレポートを見れば、その方針が誤っており、彼らのガンとの戦い方の方針に、真正面から反対しているのが理解された。

今までと同じように、カリフォルニア・グループの研究プロセスを続け、再発見した新しい研究者が、何度も舞台に登場した。

1950年代後期に、国際会議がヨーロッパで持たれた。話題は、カリフォルニアグループが1930年代に挑戦し、ガン治療法で重要な成果を得たのと同じ話題であった。

1959年に、もう一人のガン研究者は、彼女自身でガン微生物を検査した！

そして、ガンを成長させた。

しかし、この事件はガンの研究プログラムを管理している権威ある科学的な階層には、ほとんど影響がなかった。

ペンシルバニア・グループの研究は、1967年の終わりにニューヨーク科学アカデミーの年間報告で、発表された。

1969年には、ニュージャージー・グループはその調査結果をニューヨーク科学アカデミーに掲載した、そして、再プリントの要請が押し寄せた。

依然として、ガンの権威は公的な研究もプライベートな研究にもそして治療に関しても、資金供給の決定に関与しており、その時代の科学的な発見（研究所で再現可能な事実）を再び無視しようとした。

1974年には、細菌学の分野の重大な研究が、発表された。

1930年代カリフォルニア・クリニックに関与した細菌学者の主張がこの後の数十年間にとのように、確認されてきたかを示した。

カリフォルニア・グループの研究所の1930年代の証拠と、その後にも出てきた研究所の証拠は、癌をウイルスと細菌の方向から研究することを否定してきた、ガンの正統的な理論に基づく1930年代1940年代、1950年代そして1960年代のガン治療法の全てが、理論と同様に、基本的に間違っていることを納得いくように実証した。

1976年には、カリフォルニア・グループの治療装置と30年間の臨床結果を記述した最初



の記事は、大衆的な雑誌に発表された。

記事は、ボストン、マサチューセッツで出されているニュー・エイジ・ジャーナルに掲載された。

その記事はガンの権威者による 40 年間の怠慢と弾圧を概説した。

この雑誌は現在は全国に毎月出されているが、その時は、小量配布されていた。

しかし、また、何も起こらなかった。

公認された医学の専門家ではない者達は、20 世紀に確認された「ガンの痛くない治療法」の医学的ストーリーを追いかけて、1980 年に、2 人のフランスの研究者は、カリフォルニア・グループのオリジナルな発見が国際的な科学的事実であることを示す本を出版した。

保守的な医学権威は研究所の実験と直接矛盾する理論を信じ続けたが、まったく新しい癌研究と治療のアプローチの基礎は科学的な現実として確認された。

1986 年に、この分野の権威は、以下の通りに現在の状況をまとめた：

「細菌学者は、2-4 年後に生きている微生物に関心をもつようになったが、実際生きている微生物を本当に観察し始めると、目の前で起こっている多様な変化のプロセスの問題で頭は混乱した。彼らに何を見ているか教えなければならなかった。

「ここには彼らが知っていると思っていたのと全く異なる世界があった。」

昨年、ヨーロッパの指導的科学者は、1930 年代にガンを治療したカリフォルニア・グループの研究と主張を再検査した。

彼は結論を出した、「この原理は、完全である」

この続きは、抜群の科学的な才能と意欲のある何人かの研究者の織り成す、複雑な物語である。

悲しいことに、この物語は科学的な無知と、欺瞞と、権力の濫用と犯罪行為の話でもある。

公的な信用がこれ以上侵食されなければ、議会、メディアと科学的なコミュニティはこれらの問題を公的に調査しなければならないはずだ。

ガンで毎日 1,200 人以上のアメリカ人が死に、ほぼ毎分、1 人死んでいる。

そのガンによる死はただ単に、苦しみが止まる時間でしかない。